

9年目の全島帰島がめくってきて

坪田 鈴木代志子

三宅島大噴火全島帰島の2月1日がまためぐってきた。

私たち三宅村職員は、9年前、2月1日の全島帰島に向けて、新年早々、一足早く三宅島に帰島することになった。ところが、1日目、2日目、航海状況が大荒れで引き返し、3日目ようやく上陸した。「まだ帰島はむりだ」と雄山は言っているかのように。

今の仮庁舎にて集合して、決意を新たに、団結を誓い、村民を無事にむかえ、復旧・復興に自分ながら全力に遂行しようと誓った。

村立保育園が1園になったため、保育士から坪田出張所の窓口業務職に配属になった。ドキドキであったが、顔見知りの皆さんを迎えたり、手続きを手伝ったり、相談に乗ったり、情報を伝えたり皆さんに喜ばれたかなと勝手に自負している。

いつの間にかロビーが、交流の場になり、皆さんの会話と笑顔と笑いに喜びを体感し、これからの私の生き方を見出し始めました。

月1回の土曜日の老人クラブのお手伝い、老人会中心の坪田芸能保存会、隔週水曜日の夜にカラオケ会など皆さんと集まるようになった。

集会場の公民館が無くなって不便になったが、3年前定年退職をしてから、毎週月曜日「月曜サロン」と称して、旧坪田小で集まって、しゃべったり、歌ったり、体操をしたり、学習をしたり、趣味を広げたりして楽しんでいる。会の終わりは、必ず避難中に三宅を想って歌『望郷の詩』を合唱して、絆を深め「またあうべよー」と元気になって解散するのです。本当に嬉しい！！

もうひとつの楽しみは、当時25名の園児たち。帰島した児、残った児それぞれですが、私の近くの三宅高校で姿を見たり話したり、御祖父母様方から近況を聞いたり、年賀状をいただいたりして成長をうかがえる時です。

すでに、いちばん年少だった児は、高校1年生になっています。

一昨年、乳がんを患いました。体調調節に高校前を歩行していたら、数人で野球をしていた生徒さんから「園長先生大丈夫？」と声がかかりました。

心配してくれていたんだ…。思いやりの心に感謝と成長に嬉しくもあり、9年の歳月の月日の流れを実感しています。

どこに住所を置いても、2000年6月26日三宅島噴火を遭遇した島民であることを糧に、私は主人と共に、火山ガスに強い明日葉生産を生きがいに三宅島で私らしく生きて行きます。

2014年(平成26年)1月30日(木) 夕刊

毎 日 新 聞

曼 染 島

三宅帰島9年

た。今年4月には東京・調布空港とを結ぶ航空路線が開設され、7月には新造船「橘丸」が就航する。もともと豊かな黒潮の海に浮かぶ野島の宝庫だけに、観光客の増加に期待が膨らむ。

しかし島民の悲願だった人工透析は設備が整ったものの、看護師を確保できず運用できない状態という。三宅島ふるさと再生ネットワークの佐藤就之会長(78)は「医療が整わなければ、病気になるとうまた島を離れざるを得なくなる」。長らく留守にした地域を復興する難しさを感じる。

【大槐英二】

東京・竹芝桟橋から三宅島行きの船に乗ったのは2005年2月1日夜。00年の火山噴火によって全島民が都営住宅などに避難し、4年5カ月ぶりに故郷へ戻る島民の第1陣に同行取材するためだった。帰島といっても、火山ガスの放出が続ぎ、大きな不安を抱えた中での再出発。それでも島民たちは自宅へ戻る喜びをかみしめていた。

あれから9年。火山ガスの放出量は徐々に減り、昨年7月、ようやく島内全域から高濃度地区がなくなった。ガスマスクを持ち歩く必要もなくなっ

2014.1.30

(註：3月下旬より内地の病院のご協力で人工透析は開始しました。)

帰れない島民と情報共有

火山が噴火して避難した三宅島(東京都三宅村)の人々に、ふるさとの情報を届けてきたミニコミ紙「三宅島新報」が今月、創刊から八年で五十号を迎えた。都内に避難していた島民が神奈川県の高校に協力を求めたのがきっかけで、同校の卒業生らが制作を手伝ってきた。関係者は「三宅島出身者の孤立を防ぐことができた」と、今後も息長く続けたい考えだ。

(松村裕子)

三宅島は二〇〇〇年の噴火で、全島民が二十三区などに避難した。全島避難は〇五年に解除されたが、自宅の再建資金がない高齢者や、火山ガスを恐れる子育て世代の中には、帰島をどうもる人も多かった。全島避難中は月一回、「連絡会ニュース」が発行され、ふるさとの情報が共有されたが、解除後は作り

これまでに発行した「三宅島新報」を振り返る佐藤さん(左)と、三宅島ふるさと再生ネットワークのメンバー＝東京都板橋区で



創刊8年 三宅島ミニコミ紙50号

手があらず、制作が続けられない状況だった。板橋区に避難していた元連絡会長の佐藤就之さん(左)は「帰れない島民に情報が届きにくくなる」と心配。〇三年に取材を受けたことがある神奈川県伊勢原市の私立向上高校に、手伝いを依頼した。

同校新聞委員会の生徒らは取材の時、「何かできることはありますか」と協力を申し出ていた。元新聞委員の卒業生ら約三十人が取材や編集作業を担うことになり、〇六年一月から隔月で、A4判四頁の「三宅島新報」発行が始まった。

元島民や支援者らでつくる「三宅島ふるさと再生ネットワーク」(板橋区)が寄付金で印刷費をまかない、現在は区部などに約二百部、島では全世帯分の一、千六百部を郵送などで配

避難者と神奈川の高校が協力

三宅島の全島避難 2000年6月に火山活動が活発になり、7月に雄山が噴火。三宅村は9月に3800人の全島民に避難指示を出した。05年2月、4年5カ月ぶりに避難指示が解除されたが、当初は火山ガスのため立ち入りが規制される区域が多かった。居住制限のかかる地区はまた残り、現在の人口は2700人。噴火前に年8万人だった観光客は半減している。

元島民や支援者らでつくる「三宅島ふるさと再生ネットワーク」(板橋区)が寄付金で印刷費をまかない、現在は区部などに約二百部、島では全世帯分の一、千六百部を郵送などで配

島に行き、民家に泊めてもらった体験談を書いた。島のことを多くの人に知ってほしい、復興に役立てたいと、島の物産展も企画した」と振り返る。

「区部などの配達は以前はボランティアが担い、高齢者の見守りを兼ねていた」と佐藤さん。新聞委員OBの山尾啓予さん(右)は「友達を連れて島に行き、民家に泊めてもらった体験談を書いた。島のことを多くの人に知ってほしい、復興に役立てたいと、島の物産展も企画した」と振り返る。

三宅と歩んだ8年間
活動がメンバーの成長の糧に

2013年3月28日

三宅島新報50号